

〈1984年度第2回研究集会報告〉

レクリエーション学研究の対象と課題 ～(仮)『レクリエーション学研究法』編集に向けて～

1984年12月8日

上智会館第3会議室 (東京都千代田区)

コーディネーター 渡辺 貴介 (東京工業大学)
西野 仁 (東海大学)
発表者 高橋 和敏 (東海大学)
報告者 西野 仁 (東海大学)

(進士)

レク学研究法の著作が、学会として作れないかと考えている。

前年度までの過去10数年間の学会の蓄積として「レク学研究法」をつくり、これをもとに、それぞれの場面で研究をすすめていけば、レク学研究も飛躍的に発展するのではないかという期待をもっている。

今年度の研究例会は、昨年までの体系化に対する討論を土台として、全体を俯瞰しながら、各分野の位置づけをきちんとやっとうと思う。この様な形で、全体の構成ができれば、半分以上、本はできたようなもので、多くの皆さんに、執筆に参加していただきながら、「レク学研究法」を完成したいと思う。

(西野)

今日の研究集会は、私、西野と、東工大の渡辺の2人がコーディネーターをし、学会理事長の東海大、高橋先生に「レク学研究の対象と課題」というテーマで話をさせていただく。

昨年までの討論をまとめる方向で、ディスカッションできればと考えている。

(高橋)

実は、今日のことで、どうしようかと思ったが、責任があるので、頑張らなければと思い、充分討議してもらおうためのたたき台を出すということですすめていく。

レク研究の問題は、それぞれ難しいと思うが、今日のテーマは、簡単に言えば「レク学研究法」の章だてをすることだと理解している。

去年の研究例会で、大まかなことはできていると思う。

まず、最初に、研究領域をどうするかについて考えてみたい。

他学会の研究領域について、まとめてみた。

文部省の科学研究費の申請の際、申請する研究が、どの研究に属するかを記入する必要があるが、この場合、大きく9つの領域に分けてある。体育の場合は、複合領域の中に体育学があり、そこに属するケースが多い。

日本学術会議は、第1部から第7部までであり、科研費申請の場合と同様な分け方をしている。

これらは、旧来の専門学問、古くからある学問の体系に従ってやっている感じである。

体育学会の発表の時の研究領域の分け方はもっと細かく、類、網、目に分けてある。

以上述べたような分類の中で、それでは、我々のレク研究はどこにあてはまるかということ、どうも、これだとはっきり言うことができないのが実状である。

また、心理学会では、日本心理学会、教育心理学会、日本応用心理学会、日本社会心理学会、その他の心理学会がたくさんあるらしく、17にもぼっている。ここでの分け方は、専門(dicipline)で分けたというよりは、問題の分野で分ける傾向にあるようだ。

このような傾向は、38の常設専門分科会を持つ国際社会学会にもあてはまる。学問体系で分けたり、問題別に分けたりで、ごちゃまぜの感がある。この中に、Sociology of LeisureやSociology of Sportsが含まれている。

1981年、カナダで3回目のレジャー研究会議が開か

れた時の分類も問題別であった。

この9月、フランス郊外で開かれた、「世界自由時間レジャー研究会議」では、いわゆるMultidisciplinaryが6つ、専門が7つの分科会で今後やって行くことになった。ここでもその会にいちばん向くような便宜的方法で分けている。

わが国では、江橋と池田が「レク学体系」の中で、対象は複雑で、広範囲にわたるが、こういう研究領域が考えられるということで、表1のような4つをあげている。それから、表2は、鈴木忠義の分類であり、13に分けてある。表3は、西野ので、あるモデルを考え、そのモデルから研究領域は、このように分かれてくるのではないかという提案がある。

表1 江橋・池田の分類（レクリエーション研究序説・レクリエーションの科学・1975）

1. 余暇およびレクの基礎理論ならびに歴史に関する研究
2. 余暇行動に関する研究
3. 行政管理学的研究
4. 余暇資源の開発と保存に関する研究

(p11-p32)

表2 鈴木忠義の試案（レクリエーション研究・10号・1983・p60）

- | | |
|---------------|----------|
| 1. 概念と諸学の位置づけ | 2. 意義・目的 |
| 3. 構成（と要素） | 4. 分類 |
| 5. 歴史 | |
| 6. 行動 | 7. 活動と教育 |
| 8. 時間 | |
| 9. 経済・産業 | 10. 社会 |
| 11. 行政 | |
| 12. 情報・啓蒙・宣伝 | 13. 空間 |

研究領域の設定とか章だてを、今までやってこれた先生方ををまとめて、妥協案でもまとめてみようというのが私の考えである。それで、対象は、鈴木と西野をうまく組み合わせ、それに私なりの考えをミックスしようと考えた。

こうなると必然的に、レク学体系をどう位置づけるかを考えねばならない。

私が今、考えている範囲は、レジャーおよびレク問題の科学というように基本的に考えたら良いのではないかと思う。

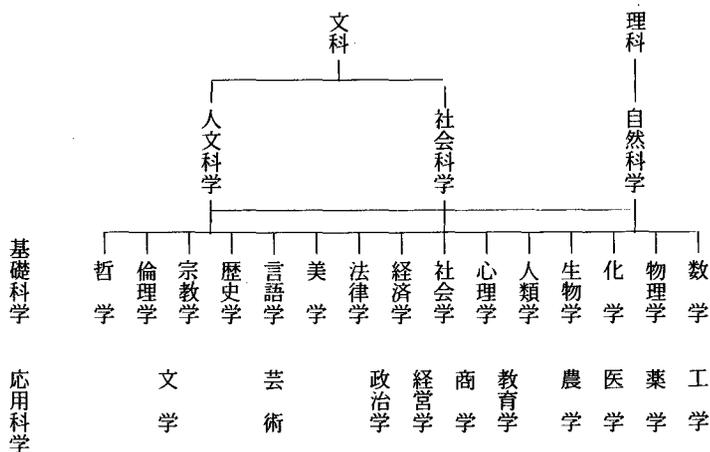
実は、西野が、レク現象ということを行っているが、

表3 西野の分類（第2回研究会・1982.11.27）

1. レク現象と人間社会のかかわり
2. 基礎研究
 - 1) 人を中心にのいた研究
 - 2) 活動を中心にのいた研究
 - 3) 組織・指導者を中心にのいた研究
 - 4) 社会の人的資源を中心にのいた研究
 - 5) 物的環境を中心にのいた研究
 - 6) 行動を中心にのいた研究
3. 実践的研究
 - 1) 場から
 - 2) 目的から

これも、私には、ちょっとひっかかって、あれこれ考えてみると、ちょうど教育学の村井先生の本を見て、やはり、こういうことに関わりがあることがわかった。これは、私には手におえないのであるが、現象というのは、—これは認識論に関わってくるであろうが、—観察し得るあらゆる事実という様な問題らしい。認識の仕方、色々違ってくるが、例えば、自然現象という見られるものがある、人間に関わりなくなってくる。ところが、レジャー、レクの問題になると、やはり人間とか社会とか、絶えず動いているものがある。そうすると、ああいうものとは、ちょっと違ってくるのではないか、何が違うかと言うと、自然現象の事実としてあるというよりは、その動きの中に、人々の関心に依拠して、現象が生じてくるのではないかという見方をとったわけである。だから、その辺のことは私にはわからないが、レクを一般に何人かが見て、それをひとつの現象であると認識したらそれをレクの現象だということは、私は肯定できると思う。しかし、それを今度研究するようになると、人が存在するから、それを介して事実はあるとしてもそれをそのまま素通りしていたら、研究の領域まで行かないのではないだろうか。事実があってそれを問題と感ずることから研究がスタートするのではないかという気がしたので、あえてレク問題の科学ということを中心に考えたわけである。これこそ後で論議してもらって充分だと思ふ。特徴を考えると、これからの場合は3つの特徴が考えられる。ひとつは、総合科学である（図1参照）。今までの科学の体系を追ってくと、これは池田が（行動科学の先生だが）表4のように書かれておられたので、比較させてもらったが、いわゆる、昔な

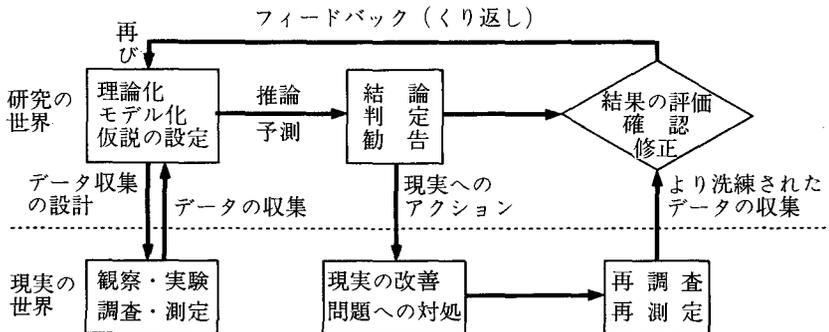
表 4



旧来の学問分野の分類例

新しい学問とそれを支える旧来の学問の例

| 新しい学問 | それを支える学問 |
|--------------------------------|--|
| 行動科学 (behavioral sciences) | { 心理学, 社会学, 文化人類学, 政治学, 法学, 経済学, 経営学, 教育学, 生物学, 言語学, 生理学, 遺伝学, 生態学, 人間工学 |
| 情報科学 (information sciences) | { 通信工学, 電子工学, 言語学, 音声学, 生理学, 遺伝学, 生物学, 心理学, 数学, 統計学, 会計学, 経営学, 法学, 図書館学 |
| 数理科学 (mathematical sciences) | { 数学, 統計学, 計算機学, OR (オペレーションズ・リサーチ), 計画数学, 論理学 |
| システム科学 (systems sciences) | { システム工学, 管理工学, 制御工学, 通信工学, 社会工学, 経営学, OR, 教育学, 生物学, 生態学 |
| 生命科学 (life sciences) | { 医学, 農学, 生物学, 分子生物学, 遺伝学, 疫学, 薬学, 環境衛生学, 生態学, 放射線学, 気象学, 地理学 |
| 地球科学 (earth sciences) | { 海洋学, 気象学, 地質学, 地理学, 地震学, 気候学, 地球化学, 天文学, 物理学, 農学, 生態学, 資源学 |
| 宇宙科学 (space sciences) | { 天文学, 物理学, ロケット工学, 通信工学, 制御工学, 燃料化学, 材料工学, 数学, 宇宙医学, 放射線学, 生理学, 心理学 |



実践的科学研究のプロセス

がらの学問の分類の仕方、それから、最近、行動科学、情報科学、システム科学、ライフサイエンスと色々な物が出てきている。この様になってきた段階を見ると、何かしらそこにひとつの事実なり現象なりがある。レクの場合は、それがもちろん、人との関わりであって、それとそれをとりまく環境があって、それをレクの視点、あるいはレジャーの視点で、そこを問題にした時に、それが、科学としての研究のスタートになるのではないかという先程の考えをもとにすると、ここに一番最初に、いわゆる専門分野、学際的なもの、そして SUPER MULTI-DISCIPLINARY と書いてあるが、やがて、科学が進歩していくともっと巨大化して、大きな Project でやる可能性があるのではないだろうか。例えば、私が ICU に勤めて間もなく、一人の女子学生が来て、「私は運動神経がにぶく、体育は下手だが、毎日、畑仕事をしている。だから充分運動になっている。これも体育ではないか？」と聞かれ、「それは、そうだけど見方が違う」などとごまかした

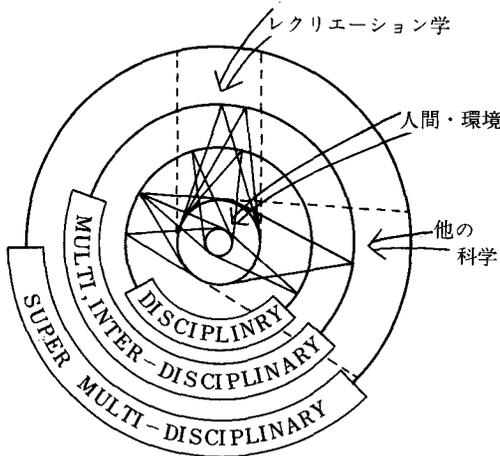
図1 レクリエーション学の位置づけ

「レジャーおよびレクリエーション問題の科学」と基本的に考える。

その特徴は・・・

1. 総合科学 (学際的)
2. 実践科学 (現場への適用)
3. 問題解決型科学

* 主として、レジャーおよびレクリエーション問題に焦点をあて、いろいろな学問分野が、協力して問題を解決しようとする。



他学問分野は、それぞれ問題とする視点によって区別される。

が、この様に色々あると思う。例えば絵を描くという行動を視点の違いによって、全々、違う見方になり、それを問題にした時は、それなりの学問が発展していくことがある。だから、くわを持ってやっても、実は経済の問題と見る場合もあるし、労働の問題と見る人もいる。また、ある人は、それをレジャーの問題と見る人もいる。この様に同じ行為でも、いく通りも見る事ができるのではないかと思う。当然、レクの場合は、ひとつの学問だけでできる問題では、もちろんない。いくつかの学問が集まって、いわゆる学際的なものというのは、当然、出てくることがある。それから、現実にレクとか、レジャーとか、活動とか、たくさんあるわけでそういうものが行なわれているので、我々の研究というのは、それとのフィードバック、あるいは、それに役立つとか、そういう意味合いを絶えず持っていなければいけないので、学問の為の学問ではないということから、学問体系と言うか、それよりもむしろ、レクやレジャーに問題がある時に、これを何とか解決していこうというのが最終的なものだから、やはり、レク学と言った場合には、問題解決型の科学ではないというわけである。表5に目をうつして欲しい。そうなってくると、実際にレク研究の目的は何であるかということになるが、一番大きく言うならば、人間が健康で明るく生活するという言い方でもいいが、とにかく我々は、研究の使命をまず持たなくてはならないと思う。それを、どういう研究の視点から見るかということ、レ

表5 レクリエーション研究の目的

「人間が、健康で明るい生活(幸福な人生)をおくる」という願いを果たすために……

(研究の使命)

「レジャーおよびレクリエーション問題」を……

(研究の視点)

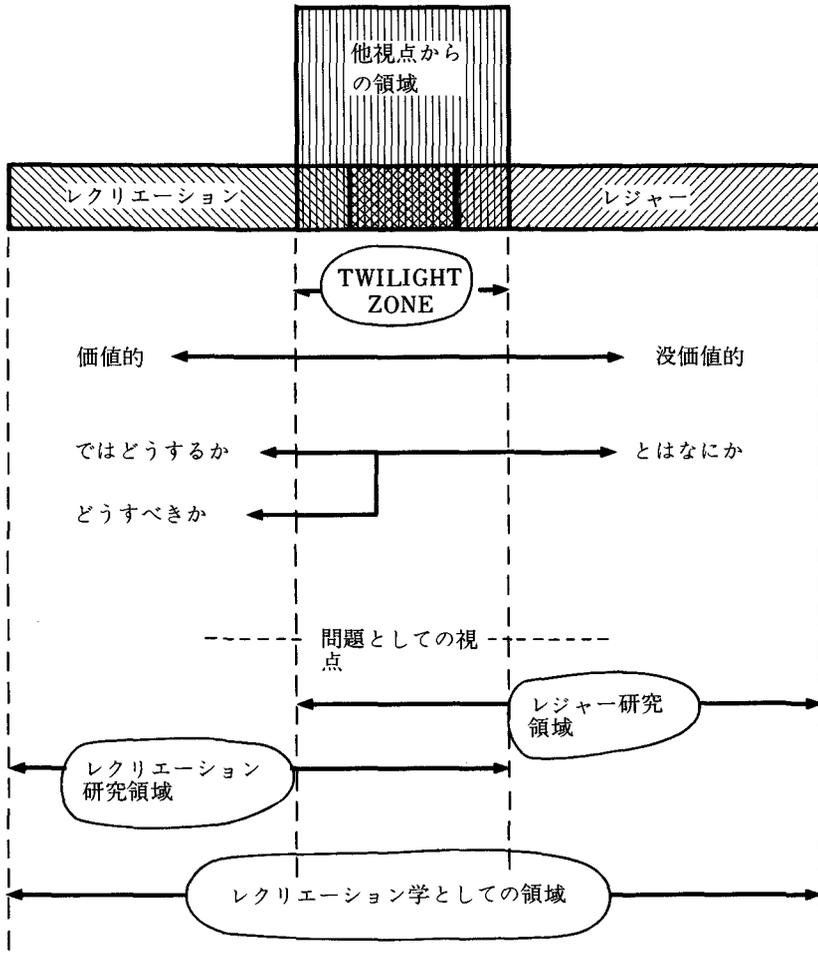
1. 客観的方法で資料を収集し (データ収集)
2. 実証科学および実践・経験的な方法で (研究の方法)
3. 一般的な理論・法則を発見し (分析)
4. 科学的に説明、予測、診断し (理論化)
5. 現実に適用し、さらに問題への対処を計る。 (検証・評価)

ク、レジャーの問題からみていくことで、5つの方法（これも充分論議してもらいたい）による目的があるのではないだろうか。そして5番目は、さらに問題への対処を図ることで、実践科学の意味合いを持たせたつもりである。こう考えてみると、レク、レジャーとは言っているが、私自身、レジャーレクをどのように考えたら良いのだろうかという疑問につきあたる。

（これは非常に難しい。）とにかく、我々が考える定義づけというのは非常に難しい。もし、定義するとすれば、ここにおられる先生方にひとりひとり互いに定義を持っていると思う。それが、学として考えた場合には、またそれだけのものがある。私は、星の教程、定義づけようとするならば、あるのではないかと思う。見方は少しずつ違っているのではないだろうかという気がする。当然、明確に定義していかなければいけな

いが、定義づけが終わってから次に進むということでは、いつまで経っても進まない。他の学問を見ても、例えば自然科学の数字を見ても、電気工学の電気とは何ぞやという論議はあまりしていないわけで、それから数学でも、例えば点と線の違いは本来はあまり良くわかっていないらしい。とにかく定義づけがないままにどんどん研究がすすめられている。ある場合には、それは障害にはならない。だから、レクの場合も、並列的に考えて行った方が良いのではないかと思う。しかし、大体の考えとしてどうなのかというのが表6である。これは私の考えだが、先程の関連で見てもえればわかるが、レクとレジャーとどういうふうに区別がつくのか。私の場合、学生に言う時には、遊びはいろいろある。ピンからキリまであり、その時の上手な遊び方がレクだと簡単に言ってしまう場合がある。（一般の

表6 レジャーとレクリエーションとの関連



人達には) そう考えると、いろいろな現象なり事実があるかもしれないが、どちらかと言えば、問題として考えた場合、いわゆる2つの面がある。「……とは何か」という問いの面がある。「……とは何か」という問いは、どちらかと言えば、事実を把握していく、あるいは記述的、説明的にやっても良いが、例えば、ひとつの遊びがある。遊びとは何ぞやというような、いろいろな問いかけがあると思う。科学的にやっこうとすると、没価値=価値をぬかして考えていかないとなかなか問題は解決できない。それが今の科学である。一時、レクは価値的か、没価値的かという論議があったが、私は両局面を持っていると思う。それをどうすべきかという問いになってくると、価値というものを考えていかなければ解決できなくなってくるだろう。レジャー・レクは、多分にオーバーラップしている部分があり、他の領域でも、— 例えば、観光問題としてみる、労働問題としてみる、また社会学の方からみるという視点があり、入りまじったあいまいな所があるような気がする。科学とは、よく断片的にここまでは自分の領域であるという具合に線引きをするが、私は、線引きも必要ではあるが、あいまいさが現実の問題には必ずあるわけで、この辺を厳密に研究していく対象にもなるのではないかと思う。図に TWILIGHT ZONE があるが、最近、林知己夫先生が、「あいまいさを科学する」ということを良く言っている。いわゆる、線引きではなく、そこに見られるあいまいさをあいまいさとして大きく包みこんで、そこで厳密に何か科学的にやっていったなら、手法が見つかるのではないだろうかということを書いて、私もレジャー・レクの問題を考えると、当然出てくるので課題に「あいまいさへの課題」をのせておいた。あいまいさを問題として見た場合、レジャー研究のあるいは、レク研究の領域があるであろう。レク学会としては、それらをひっくるめて、レク学と考えるとよいのではないかと思ひ、その図を書いたわけである。こうなると最終的に—つまり一番最初の問題になってくるが、テーマである「レク研究の対象と課題」は、何であろうかということになる。そしてレジャー・レクの問題には、当然、人間、社会、物的、人的環境も当然含まれる。その研究の領域は、他の学会の領域、西野、鈴木資料、レク学会の発表で区分している5つの分け方を、もう少し徹底的に考えてみようと思う。そこで、私は、その他を入れて9つの領域に対象を区分けしてみた(表7)。1番目の

表7 レクリエーション研究の対象

「レジャーおよびレクリエーション問題」が研究の対象となる。この中にはそれらにかかわる人間、社会、物的・人的環境も当然含まれる。

その研究領域は……

1. 理論(概念、歴史、方法論)
2. 経済・産業
3. 意識・行動
4. 活動
5. プログラム・効果
6. 資源・空間
7. 教育・指導者
8. 政策・運動
9. その他

理論は「……とは何か」ということを中心的に考えることである。2からその下の問題は、それぞれオーバーラップすることもあるが、「……とは何か」ということと「……すべきである」というものを両方のものを抱えながらできている問題である。説明していくと2.経済・産業の問題は、レジャー産業のことや、経済におけるレジャー実数の問題であり、もちろんレクの場合には、ひとつの問題としてとらえることができる。3.行動・意識とあるが、今までの学会の領域では、行動の領域でやっていたものである。4.と5.は、学会領域ではプログラム開発に入るものである。しかし、プログラム開発を見ると、何でもそこに入れてしまっているように思う。1つは、活動の素材、いわゆるゲームのようなもの、物を使うものなど、この様なことを研究対象にすることもできるので、それらを使ってひとつのプログラム—例えば職域でのプログラムによる効果はどうかということ—の対象として考えられなければいけないと思う。6.は実際の場面のハードウェアの問題であり、7.はソフトウェアの問題、8.は6.7をあわせて、政策、レク運動、あるいは組織でもよいが、実際の場面で推進していく問題解決である。この様に区分けしたが、前回の学会大会で江橋も言っていた様に、きちんと区分けてこの中に入れなくてはいけないという考えは毛頭ない、発展する学問であるならば、それなりに柔軟性を持ち、その他の領域が増えても良いと思う。しかし、今の時点ではこの区分けの仕方が妥当ではないかと思う。次に課題を簡単に話をして、討論に移り

たいと思う。

他にも課題があると思われるが、たたき台として次の7つを挙げてみた。1.あいまいさへの課題は、先程話をしたが、学問研究をする場合、常識であるが、物事をできるだけ単純なところから始める。つまり、単純化しながら、実験の場合は純粹状態を保持しながら、できるだけ小さな範囲内でやっていく。ところが、我々の研究の場合、この様になかなか分けて考えられないことがある。例えば、社会学の加藤先生の話であるが、最近の社会学は科学を追求しすぎるが故に、本当の人間、社会が失なわれつつある。人間や社会現場は厳密な意味での科学的法は使えないのではないかと思う。あまりに科学的なものをモデルにしたために起きたことでもう少し柔軟性を持たせた方が良いということである。私は、科学的に追求して行かなくてはならないことも事実であるが、反面、いろいろなあいまいさをいかに厳密に研究していけるかにある。我々はいくつ避け通ってしまう。自然科学はきちんと研究していくのでどんどん進歩していくが、社会科学はあまりに複雑なので、分断することができないので随分研究の開きが出てきていることも事実である。しかし、とにかくあいまいさは当然あることなので、あるものとして考えていく必要があると思う。

2.学際化への課題は、西野の言うとおり、専門分野の雑居状態にならないことが条件である。それぞれが対話をしながら、良いものを相互吸収、相互理解することによって研究はすすんでいくと考える。これからの科学を考えるならば、学際化は避けて通れないことである。

3.実践化への問題は、三隅が良く言っていたことだが、レクの問題は現実にあることで、絶えず学をやっているが、常に現実が先行していて、それをふまえてやっていかなければいけない。それからもう1つレクは、レクという言葉がなくなった時に、始めてレクになっているのであるということ。私は、現在レクが問題になっているので問題にならなくなるようにするわけだが、絶えず問題が起きてくると思う。そこで、レクの研究が必要になってくるのであるが、とにかく、できるだけ科学的にやって、現実にとどれだけ対処、応用できるか、そして検証し、やり直しを積み重ねて、絶えず実践との関わりを考えなくてはいけないと思う。

4.総合化への問題は前との関係もあるが、現在、非常

に細分化、専門分化してきている。例えば、社会学は細かな学会がいくつもある。このことは、専門レベルのアップになるが、分化しすぎて、全体像からだんだん切り離されて行き、いわゆる、学問研究のための研究になってしまう。必要なことではあるが、できるだけ総合して問題に対処できるように持っていく努力が必要であると思う。最近、米では、レク学科と言っていたものが、Leisure studyとかLeisure Behaviorのような言い方に、体育学の中では、運動学にしたら良いのではないかと言われている。つまり、専門分化の現れである。先程のあいまいさを包みこみながら総合的に対処していくことが必要である。

5.国際化への問題は、最近どの分野でも叫ばれている。フランスでの会議のように、世界でいろいろ論議されてきているが、人類に関係あることは、国際的な視点から研究を進めていかなければならない。そのためには、当然、情報交換システム、検索システムの研究も課題として出てくるであろう。

6.インパクトへの課題は要するに、我々の研究が、社会にインパクトを与えることができるかということである。実践科学として考えるならば、例えば、レク運動はどうあるべきかということにレク協会では、いろいろ考えそれなりにすすめているが、それを学問の対象として考え、どうするかということは、なかなかそこまではっていないように思う。また、行動科学を考えてみても、良い意味で、悪い意味でインパクトを与えてきた。我々も、社会へのインパクトを考えなくてはいけない。

7.使命感、価値観への課題は何だろう、どうしてなんだろうという個人的な学問の興味だけでなく——もちろん、必要なことで目的を持って研究しているが——我々は人やそれをとりまく環境を相手にしているので、できるだけ、より良い生活、幸福な生活ができるように、インパクトを与え、手助けとなるものを常に考えておかなければならない。そうすると、関わりがでてくるものは、価値観である。研究の対象としても価値観は非常に大切な分野である。どうすべきかというレクの問題を考える時に、例えば「上手な遊び」と言えば、下手な遊びがあるわけで、上手とは何であるかという価値観がある。また、より良いとは何であるかという様な価値観の追求がもっとなされていかななくてはならないと思う。

ということで7つをたたき台にしたいと思う。

最終的に、もし私が本を作るならばということ(表8)内容および章立て試案を考えてみた。もっと皆さんに論議してもらいたいと思う。本を作る場合には、具体的にすすめなければならないが、まず、誰が読むのか、どの位の本にして、値段はいくらぐらいかということと並行して考えていかななくてはならない。

表8 レクリエーション学研究法(仮題)
内容および章立て試案

1. レクリエーション学研究の成立
新しい学問としての基本的な考え方
2. 研究の動向
日本および外国、過去から現在など
3. 研究資料の収集

| | |
|-------------|--------|
| 1) 文献・資料 | 2) 調査 |
| 3) テスト・測定 | 4) 面接 |
| 5) 観察 | 6) 実験 |
| 7) シュミレーション | 8) その他 |
4. 研究の手法

| | |
|--------------|-------------|
| 1) 理論化 | 2) 仮説・モデル構成 |
| 3) 研究計画の立案 | 4) 統計的基礎 |
| 5) 数量化尺度構成 | 6) 検定 |
| 7) 国際比較 | 8) 実験計画 |
| 9) コンピューター活用 | |
| 10) 論文計画 | 11) その他 |
5. 課題
これからの発展を目指して
* 文献・資料その他の参考資料

このように、いろいろな事はあるが、とにかく、これは大変自分の領域を犯したことで、3.研究資料の収集、4.研究の手法など勝手なことを挙げたが、あくまで一例で、本を書くには、このような流れで作っていただければいいのではないかといたたき台である。

勝手なことを話したが、これで一応終わります。

(西野) 一応の話は終わったが、実は今日は全く筋書きがないわけで、前半は私が、後半は渡辺先生が担当することだけ決まっているので、渡辺先生に。

(渡辺) あら筋のないところで進行させていただきます。私は東京工業大学の社会工学科におまして、

もともと都市計画をやっていたが、観光計画の方へ入り、レクヘというキャリアである。学生時代は都市工学に、現在は社会学にいて考えてみると、都市も社会もいろいろな形でとらえられる。都市工学もあれば、都市社会学もある、社会学も同様であろう。レクも多分同じ様なあるいはもっと広い概念で捉えることができるかもしれない。私の経験から言うと、都市工学も社会学もできてから20年近く経つわけで、この位、経ないことには、社会に認識されない様な気がする。と言って、何もしないわけではなく、学として形を作っていくならば、最大限努力をしても20年位はかかると思うので、あせらずにやっていけば良いと思う。

高橋先生の話聞いて、大変、刺激的に受けとめたわけだが、まずは手がかりに、私から高橋先生に質問させて頂きたいと思う。レク学研究法(仮題)の章立てであるが、対象のところの1の理論は別にしても、2以下は仮題の研究法に沿って、8つそういうものがあるというのか、それとも全部クロス、横断して章立てにまとめた方が良いのかどうか。

(高橋) どちらかというクロスして考える方です。読者にもよるが、1.レク学研究の成立の中に対象、目的とあるが、それぞれを章立てにしても良いと思う。もし手法に重点を置くならばここは簡単にして、クロスしていろいろな方法が使えるという視点でとらえたわけだ。

(渡辺) かなり研究法の法に力点があると考えてよいのか。

(高橋) 私としては、どちらかと言えば方法をていねいにした方が良いと思う。

(渡辺) 進士先生は、この辺をどう思うか。どちらに重点があった方が良いと思うか。

(進士) 高橋先生の言ったとおり、読者をどの辺にしようかだが、単純に言って、大学の学部・大学院が中心になるであろう。もちろん現場のレクリーダーも考えている。

仮題の章立ての5課題があるが、多分、4手法との間に各論的展開で、先の1~9が入るのが理想に思う。この対象と手法をクロスして事例が入ると良いのだろうが、そうなるのかえって使いにくい面があると思う。4の手法と研究

領域1～9の対象ごとの事例研究のようなものとのウエイトの問題であると思う。ここにいろいろな立場の方が集まっているので討議して頂きたい。それから、対象は刻々と変わっていったよいものだと言っていたが、本にもある生命があって10年使うとしても、50年先は見通す必要はないかもしれない。そう考えると、研究領域にどれだけのウエイトを置くかということである。また、先程、社会心理学その他で、今起こっている課題に対して即応してやっているという話があったが、それは戦略論としては必要なことであると思う。レク研究の中で、当面職場なら職場など、それをもっと肥大化させないとやっていけないとか、実際の政策はどんどん変わっているから、行政面でその辺をさせなくては行けないということもあり得るわけで、そういう意味では1～9の中で8の政策、運動にウエイトをかけるという判断である。その時に政策、運動とまとめるか、実際のレク政策という項で立てるかという位に、おそらく議論は細分化されるであろう。この事は、次のステップではあるが、とりあえず対象軸か手法軸か、多分両方が必要と思うので、今度は記述の話になると思う。

只今、進土先生の話で対象か手法かということだったが、皆さんのいろいろな立場でどちらが欲しいか、役に立つか、どのように考えているであろうか。

問題は動向のところ、これはドキュメンテーションになるわけで、これがどの位まで実際に作業ができて、ドキュメンテーションの内容分析がどの程度できるか、その内容分析によって手法ができるわけである。まず作業をやらなくてはならない。その作業をやるために、今まで6分科会に分けてやってきたわけで、その作業がどの位までできるかが、1番大事な決め手になると思う。

(渡辺) 内容別にして、その中で具体的に研究対象がどのような方法でできるか整理して、もしできるならば、最後に手法ということで、レク研究の手法はこうして作られてきて、この様に変遷してきたという形にまとめてはということになりますね。

他に何か？あるいは研究領域の分類について何かご意見は？

進土先生の地方自治体のレク対策の方法をかがけてはどうか。つまり、あまり体系にとらわれずにもっとホットな形で分類してはどうかということに対していかが？

(質問) 資料1-1の研究領域の3と6の関わりがわからないのですが。我々にとって資源・空間というのは、意識・行動との関わりであると思うが、これを分けるとどういうことになるのか？

(高橋) もちろん、資源・空間と行動とはもちろん関わりがあると思うが、前のプログラムでは、ここを資源・計画と分けてあり、私にもわからなかったもので……。要するにハードウェアを考えて、もちろん行動にも関係があるが、今までの行動研究というと、意識調査とか、レク行動をどのように見るかという様なもので、人だけの行動を見る分野が非常に多かったので分けた。

(渡辺) この様に理解してはどうかと思う。理論と意識行動というものはすべてのものに関わってくる。経済、産業、活動、政策にそれぞれ関わってくると思うので、それは、レク学の中の基礎学と位置づけて、残りをレク学の応用学という様に大まかに分けてみてはどうかと思う。

(質問) それでは、2と3を入れかえることか？

(高橋) 順番は関係なく、思いつくままです。順番は考えないで欲しい。

(渡辺) 他に？

(西野) 4番の活動とはどういうことですか。

(高橋) これは、ヒントを得たのは、パリへ行った時 Leisure form という形があったためだが、form というのとちょっと意味合いが違ってきたり、ごちゃごちゃする。それで考えてみると、例えばスポーツにしても、ゲームまたは文化活動にしても、たくさん種類があるが、そういうものを研究対象にできないだろうか。それとプログラムをつけるごちゃごちゃするということと分けてある。いわゆる、ひとつひとつの素材—レク協で言っているレク財ということである。

(質問) そのことは、行動とは何でそんなことをするのかという突っこんだ本質的な言動力になっている話の解明であって、活動とは、何をやって

いるという考えか。

(高橋) 活動とは、たとえばスポーツでいえばラグビー、サッカーなどいろいろな種目についてで、その人がそこでどうにかするというのではなく、ゲーム、歌、フォークダンス、そのもの自体を研究していくということである。

(質問) その場合、例えばある球技を調べるとして、その球技の何を調べるのかで他にふり分けることはできるか。

(高橋) やろうと思えばふり分けることはできると思うが、実際にどこにふり分けたらよいかというと、プログラムかと思うし、そうすると、プログラムが多くなっていく——発表の時も一番多かったし、また何でもそこに入れてしまったきらいがある。そこを何とか分けられないかということで分けたわけである。多分、どこかにふり分けられると思うが……。

(質問) レク学研究法が必要であるという時に考えなければいけないと思うことは、例えば、固有名詞のスポーツ名あるいはレク種目があって、これについての何かという時、例えば、研究がプログラム計画である時、それはスキーであってもラグビーであっても何でも良いわけである。極端に言うと、例えば、植物の調査の時に、調査場所の対象地を変えて、植物の目録をやたら作ることがたくさんあり、その様な研究はそれなりに分類学の世界では通用するが、応用植物学になるとあまり役に立たないことになる。そうすると、やはり、生態学、生理学の切り方で研究を深めないとだめなことがある。この様なことを、今の行動、活動という議論で考えたかったわけである。

(渡辺) サブ概念が提示されていないので、話が空転する場合があります……。

高橋先生が1ページに学際化とか総合化という課題を出したが、雑居ではないということは多分共通に認識する部分を少し減らしてこうということ、お互いのコンセンサス、レク学会のコンセンサスを増やそうということであろう。そのひとつの試みが、レク学研究法を作ろうということであろうが、その一歩前に、事典、辞書というか、あるいはボキャブラリー集を作るべきなのかもしれない。ある人は、活動

と言ったり、行動と言ったり、言っているものはなにかという様なことがあるので、きちんとすべきであると思う。私は本を読めばわかるというのではなく、最後の数十ページを使って、基本語意と解説をつけ加えると良いと思う。最後の※印、文献、資料その他の参考資料というのが、これに当たるものであると思うが、是非つけ加えたらどうかということをご提案したいのだが。

(浅田) そのことは、一番大切なことだと思う。レクは何かということとはなかなかむずかしいわけで、類似概念つまり、類似語を頭につける——例えば、芸術とかスポーツとか——それから、あいまいさへの課題になるのであり、これを何とかしないと進まない。むしろ後につけるよりも前にもってくるべきだ。それから高橋先生の話で現象から理論化へという話があったが、まさにその通りで、ドキュメンテーションをやると同時に、現象が要求する、または現象は何をもってレクと考えているか、そのためにもっと必要な方法論、手法は何なのかという考えを一方では持っていないてはならない。つまり両方からのさみ打ちにすることが大切である。

(渡辺) 先程私が言った地方自治体のレク政策とは、単なる例であって、そうしたいということではなく、この1～9の様な中項目程度の分類が良いのか、また、学会で5つ位に大まかに分けてあるが、大きく分けておいて、その中を少し分ける方が良いのか、つまり(大きく分ける方は、西野先生のがどちらかと言えばそれに近いわけだが)、大きく分けておいて(融通性のきく分け方)その中で現実に遭遇させて分ける方が良いか、この9項目でうまく分けるかについてどう思われますか。何かあるならば、9項目に限らず増やすことも可能。多分、次回以降の研究会のプログラムは、カテゴリー分けした領域ごとにおさえていく形になると思うので、今のところはこのことに関して結論を得て終わりたいと思う。いかがでしょうか。三隅先生はいかがですか。

(三隅) 私は、レク研究が1冊にまとめられることは良いことであると思う。ところが、この段階の前に1つお願いしたいことがある。ちょうどレ

ク協の園田さんがいるので、特に今年の学会大会は鹿屋大で、レク大会は鹿児島で行なわれ、学会の方は、ほとんど全国大会の方に関心をもっていない。逆に全国大会に出た人は、学会大会に何の関心も示さない。これは研究が一冊の本にまとめられる以前のひとつの現在の日本の大きな問題点である。ご存知だと思うが、こんな例がある。米のレク雑誌に大学院の学生が論文を出した。その学生は、レクリオロジーという文字を提唱し、今後どんどん使おうではないかということで、今後使われ出せば、それに対応する日本語も考えなくてはと思った。それがレク学ではないかと思った。その後、レクリオロジーと書いた本をほとんど見ない。そしてレクに関するいろいろな本が出てきたが、そこに私は、レクの理論・活動の本当の姿がある様な気がする。レク協の全国大会はほとんどが実践者の集まりでいわゆる、Practitioner で、学会には理論家 Theorist であるが、それが両方からからみ合って、レクがはっきり国民に認識される様な気がする。もっと学会員は、実際に目をむけて部屋の中だけの議論でなくすれば、もっと巾の広いものになると思う。今日のテーマとはずれているが、このように思った。

(園田) 三隅先生の言っているように、現場での立場から言うと Pratical な活動の土台になるような研究をしてもらいたい。

本を作るにあたり、現場を代表しての要求は、なるべくわかりやすい本にしてほしい。それから、レク学は確立しているものではないと思う。研究法でも、学の成立をあっさりとはばさないよう、なぜ今レク学かということを、じっくり話した方が良いのではないか。浅田先生のドキュメンテーションをしっかりと分析することも関連してくると思うが、新しい学問として成立するのかということをしっかりつめて、根拠そのものをもう一度考えることから始めると、レク学が必要であることがわかると思う。手法を細かくとるよりはということと、それに、進土先生が言っていた対象軸——具体的にどのような研究であるのかがうかがいあがってくるような点を期待したいと思う。行動と活動の区分けのことだが、現場の人間は、レク財=形のあるもの

をとりあげていかざるを得ない。その活動がいかなる根拠を有し、意味を持っているかを掘り下げて欲しい。レク研究と言うとレク行動がいかに生まれるか、いかに変化するか、いかに社会と関わりあうかという事を見ていくことと思う。その行動が活動化する、やがて種目になっていく様なところで考えてみると、一般的に余暇行動がどうであるかなど研究してみると、現場にはあまり役に立たない。むしろその余暇行動が健康作りのためのスポーツとして具現化される所を問題にして欲しい。つまり、行動が活動となって行き、Practical な領域が開けてくるように意図的にしぼって書いてくると、大変役に立つと思う。研究者も現場指向で手法なり対象を書いて欲しい。それから、前理事会でレク指導研究分科会を作ってもらいたいと提案し、基本的には了承されたと考えるわけだが、運動のレベルでは、ひとつのレクを素材にしながら、地域、職場などで価値の実現を目指しているわけで、それはレク指導の意味、方法、対象をしっかりとさせたい。レク学の中の1分野ではあるが、現場と結びつけるという意味で、あらためてレク指導の学問的根拠を掘り下げていくようなことをしたら良いと思う。学会員の中には現場の人がたくさんいるので、その人達を中心にレク指導の分科会を作ってもらい、もちろんレク協も力を入れて協力させてもらい、学会の三重大会ではその成果を出したいと思う。

(渡辺) それでは、とりあえず、レク研究の研究領域のカテゴリー分けの結論を得たいと思う。

高橋先生のその他を含め9つあるが、今の園田先生の話だと、レク教育とレク指導は一緒のカテゴリーに入っても良いことですね。

活動と行動は一緒にした方が良いか、また、意識・行動にすると、歴史的な話をすべての原論であるという形で別に置いて、そこから始まると考えていた方が良いと思うが、どうだろうか。一緒にした方が良いか。あるいは、活動の記述の中で行動の文脈を明らかにして書くか、いかがか。

(園田) 行動というと多分、マクロにとらえたことになると思うが(行動の内容が良くわからない

が)意識・行動で良いと思うが、活動というのはそれほどの分類学に必要なことだと思う。レクのいろいろな具体的なものとして活動となるわけなので、それだけとして扱うことは大事な視点ではないかと思う。分類学は、価値がないとは思わない。遊技、ゲーム、さまざまな種目などを1つとりあげられることもできると思う。つまり、意識・行動を原論的にまとめた方が良いと思うが、活動は、ひとつにした方が良い。

(浅田) 領域設定は、多分にだぶってくることがある。

(渡辺) 「活動」は、独立した形であった方がいろいろ便利に思う。今までは、活動とプログラムになっていたが切り離し、ほとんど高橋先生の原案通りで良いと思う。

(浅田) 2.経済、産業は労働にしておき、その中に経済、産業を入れた方が良いと思う。とり方もあると思うが、労働とレクは対比関係であるので、また年令、職業——例えば農業にも関係してくるが。

(渡辺) 以上のことは、意識・行動とか政策とかすべてに入ってくることであると思う。むしろ、この経済、産業とは、例えば、ディズニーランドのような事であると思うのだが。

(高橋) 例えば、新聞によると、この年末の観光に1兆円使うというような問題があるのではないかということである。

(渡辺) 私は、レク活動が具体的にどうインパクトを与えるか、産業的にどうなのかという視点であると了解していたわけである。

(浅田) それは、労働に関連してくるのか。

(渡辺) 一応、関係していることと思うが、その対比としてレクがある。

(西野) 労働とレク、とか何かとレク、すべてのからみの中で、一理論でとらえられるという考え方もある。例えば、サークルがあり、この様な活動をしているとか、この様な形で成り立ってきたという研究があった場合、この種のものは、どこのカテゴリーに入るのか？

(高橋) やはりレク運動の視点と見るならば、運動としてとらえられると思うが。

(西野) 具体的なものを、これはどこに入るか(カテゴリー)の説明をどんどん加えて行き、整理してゆけば良いと思う。

(高橋) 今度の研究会の時には、考えられるあらゆるすべてのものをKJ法で書き出し、区分けすればもっとすっきりするであろう。

(渡辺) とりあえずこの8つ(その他を含めない)のカテゴリーに入れて、サブカテゴリーをたくさん作ってみて、次回皆さんにその表を提示し議論して頂くことにする。次から、議論した総括表に基いてやっていくということではよろしいか。

(渡辺) 他に何か？

(藪田) サブカテゴリーを作るに際し、あるべき論としての体系よりも現実に行なわれている研究をふまえて、学会のレク研究だけでなく、周辺の研究も見て、実際に存在しているものを整理するやり方でできるだけやってもらいたい。

(渡辺) その様にしてみます。今日は、時間もなくなってきましたので終わりたいと思います。高橋先生ありがとうございました。

(西野) 今後の予定は、3月に1泊2日、ワークショップをやろうと思う。いつも時間でやっているのので言いたらない途中で終わってしまうこともあるので。場所は2つあげてあり、1つは農大、もうひとつは東海大である。次回は今日の続き、カテゴリー分けと同時に皆さんの方からの意見を聞きたいと思う。いろいろ出してもらい良いものにまとめたいと思う。それから、レク学研究法ということで進んでいくわけだが、まだ全く形ができていない状態で、作ることを目標にしながら勉強していこうと思うので、ワーキンググループにも参加してもらいたいと思う。